

森・川・海とひとが共生する安らぎのまち



「津波のときは一刻も早く高台に。命はてんでんこなのす」

田老の田中地区に住む田畑ヨシさんは、昭和三陸地震津波を体験した一人。自作の紙芝居「つなみ」を読み聞かせ、歴史を次世代に語り継いでいる。当時の様子を語る田畑さんは、普段の温厚な表情から一変、厳しい眼差しとなる。

（関連記事Ⅱ特集・自主防災力を守る命／25～25頁）



昭和三陸地震津波の悲劇から77年。  
手り地震津波の惨事から半世紀。  
忘れてはいけない過去。  
風化させてはいけない記憶。  
そして、繰り返してはならない歴史がある。  
そのために、伝える人がいる。  
備え、取り組む人がいる。  
いま、わたしたちにできること。  
事実を知り、あした未来に生かすこと。  
悲劇は、二度と繰り返してはならない。

昭和三陸地震津波後のまちの姿（昭和8年3月3日、当時の田老村）

特集

自主防災力で守る命

## 津波の歴史を知る

# 三陸を襲った数々の津波

時に、海は恐ろしい――。

わたしたちに多くの恵みを与えてくれる、青く澄んで美しく豊かな海。しかし、海は、わたしたちの生命や財産を一瞬にして奪う存在でもあった。時に、海は恐ろしい――。



明治三陸地震津波（明治29年6月15日）鉾ヶ崎地区

### 津波常襲地

三陸沿岸は過去に幾度となく津波に襲われ、そのたびに大きな被害を受けてきた。特に、明治三陸地震津波と昭和三陸地震津波による被害は甚大で、三陸沿岸は「津波常襲地」ともいわれた。

### 明治三陸地震津波

明治三陸地震津波は、明治29年6月15日午後8時ごろ発生した。

この日は旧暦の端午の節句（5月5日）にあたり、各地で節句が祝われた夜だった。午後7時30分ごろから数回の地震（マグニチュード8.5）があり、8時には空を覆うほどの大津波が襲っていたという。

波高10呎を超える、史上まれにみるこの大津波は、県内で2万1千人を超える死者をもたらした。震源が近海で夜間だったことも大きな被害の要因となった。

大船渡市綾里には、38・2呎も津波が駆け上がったとの記録が残っている。

下閉伊郡で最も被害が大きかったのは当時の田老村だった。津波の高さは14・6呎を

記録し、海浜に約100本あった松の原木が根こそぎ倒され、山腹には多くの漁船が打ち上げられた。

死者の数は磯鶏村3人、宮古町12人、鉾ヶ崎町100人、崎山村90人、重茂村496人、津軽石村1028人、田老村1859人に上り、特に被害の大きかった重茂村や津軽石村、田老村の復興は難しいとまで言われた。

### 昭和三陸地震津波

昭和三陸地震津波は、昭和8年3月3日午前2時30分ごろ発生した。

三陸沖で発生した地震（マグニチュード8.1）は、海底地震としては史上最大級のもので、沿岸部では震度5相当の揺れを記録。波高は宮古3・6呎、田老10・1呎を記録した。

震源が沖合だったため、津波の到達時間は30分から40分後となり、再び寝静まった住民の多くが波に飲み込まれたという。

この津波による県内の死者・行方不明者は2600人を超えた。最大の被災地となった田老村では、家屋428軒が流失、死者・行方不明者は

明治



昭和三陸地震津波（昭和8年3月3日）田老地区



チリ地震津波（昭和35年5月24日）高浜地区



チリ地震津波（昭和35年5月24日）津軽石・法の脇地区



十勝沖地震津波（昭和43年5月16日）田老漁港



昭和三陸地震津波（昭和8年3月3日）田老地区

# 昭和

911人に上った。また重茂村175人、津軽石村2人、磯鶏村4人、宮古町（鉾ヶ崎を含む）2人の死者・行方不明者をそれぞれ記録した。

## チリ地震津波

チリ地震津波は昭和35年5月24日午前4時10分に三陸沿岸に襲来した。日本の裏側、南米チリで発生した地震（マグニチュード9.5）による津波が22時間30分という長い時間をかけて到達したものだ。

明治、昭和と被災した田老では、わずかな漁船の流失の

みで人的被害は免れたが、金浜、高浜、津軽石などで4人を超える津波により家屋が流失、850人以上が被災した。

## 十勝沖地震津波

十勝沖地震津波は昭和43年5月16日午前9時48分に発生した。宮古では震度4を記録。波高は2.5メートルあり、旧宮古市では、養殖施設を中心に水産関係で3億円を超える被害がでた。

このとき三陸沿岸各地には防潮堤が整備されており、これまでのような人的被害がなかったのは幸いだった。

# 悲劇を伝える2枚の写真

## 体験談と写真記録から

昭和8年3月3日

明治29年の大津波から37年の年月が経っていた。

田老のまちは壊滅から立ち直り、再び活気を取り戻していた。

昭和8年3月3日。おひなさまの日のこと。

午前2時30分ごろ

いつものように静かな夜だった。

午前2時30分ごろ。

いまままでに経験したことのない大きな揺れがまちを襲った。

強震――。

揺れは、寝ていた人々の背中を突き飛ばし、誰もが目を覚ました。たんすが大きく揺れ、上から物が落ちてくる。ゆがんで開けにくくなった戸を勢いよく開け、波打つ床から屋外へと飛び出した。隣家からも同じように人が飛び出してきた。沖のかなたで大砲を撃つかのような音が二度ほど鳴ったが、気に留める人はそう多くはなかった。

寒さの厳しい時期。一度、避難し

### 大切な人を失った…



昭和三陸地震津波前の田老村

「津波太郎」の異名を持つ田老地域には、昭和三陸地震津波に係する写真や体験談が数多く残されている。

体験者は「記録に残る事実だけでなく、実際に被災した者でなければわからない恐怖や悲しみがそこにはある」という。

そして、静かにこう付け加える。

「もう二度と、誰も体験してはならない――」。

でも、多くの人が再び家に戻っていた。

家々の電灯がとまり、皆、不安から安心した表情へと戻りつつあった。

最初の揺れから、どのくらいが経っただろうか。再びまちは揺れ、電灯が消え、辺りは闇と化した。少しして揺れは収まったが、これまでに感じたことのない危機感に包まれた。

思まわしい過去が思い出された。

「また来るかも知れない――」

37年前の記憶を思い出す人、親や祖父母から聞いた津波の恐怖を味わうのかとおびえる人、念のためと海の様子を見に行く人、高台へと急いで避難する人。中には「大丈夫」と再び床に就く人もいたのかもしれない。

30分後

地震から30分が過ぎたころ。

沖の汽船が警笛を鳴らす。異変に気付いた人が叫んだ。

「津波だーっ、津波だーっ」

まちは恐怖に包まれ、いたるところ

ろで悲鳴にも似た叫び声が上がった。

高台に向かつて一目散に逃げる人。はだしのまま両腕にわが子を抱えて走る母親。足の不自由な老人を背負って走る若者――。

高台へと続く細道には、大勢の人が殺到していた。まちは混乱の渦に巻き込まれていた。

### 津波襲来

突風が吹き、すさまじい音とともに津波はやってきた。

第一波。津波は湾に入って巨大化し、次々にあらゆるものを飲み込む。

第二波。さらに大きなうねりとなり、町中をかき回す。

「助けてくれー」

無惨にも、悲鳴だけがそこに人がいたことを教えてくれた。その悲鳴もすぐに、家々が碎ける轟音にかき消されていった。

火災も起きている。

燃え盛る倒壊寸前の家の中から聞こえる叫び声。炎の中に飛び込むわれを失った人――。

高台へと逃れた人たちは、濡れて冷えた体をたき火で温めた。しかし温まるのは体だけ。恐怖で心は冷え切り、不安が消えることはなかった。

手を握り一緒に逃げたはずのお父さんは……お母さんは……子どもは……無事なのだろうか。

大切な人を思い、悲しみ、泣き叫

## おひなさまの日の朝、一瞬にしてまちは消え、



津波襲来後の田老村（昭和8年3月3日）



んだ。

懸命に救助にあたる人。わずかな明かりを頼りに家族を捜す人。重苦しい雰囲気、あたりには漂っていた。

### 恐怖の夜明け

やがて白々と夜が明けてきた。

夜明けとともに、その被害の甚大さをあらためて知ることになる。

気が付くと、すべてが消えていた。眼下に広がるまちの姿に、人々は皆、声を失った。

まちは荒廃し、数時間前まで人が住んでいたのかさえわからないほど、まちは変わり果てていた。

高台に避難した人たちは、足早にまちに降りる。

跡形もなくなつた家や、がれきのまわりで、家族を捜し求める叫び声がこだまする。

「お父さん、お母さん」

捜し求める声だけが響き渡り、その声への返事はない。

まちには、逃げ遅れた人々の遺体が横たわっている。

幼子を抱きかかえたまま息絶えた親子の姿。もう少し逃げるのがはやければ、助かっていたであろう老夫婦の姿――。

今日は、おひなさまの日。

津波の後に残ったものは、悲哀と絶望感だけだった。

と絶望感だけだった。

# 津波を伝える

# 風化する歴史を語り継ぐ

「わたしのような経験は、若い人にはして欲しくない。命は「てんでんこ」なのす。自分の命を守るのは、自分しかいないんだからね」。

昭和三陸地震津波を体験した、田畑ヨシさんが描いた紙芝居「つなみ」は、当時の歴史を次世代へ語り継ぐ、唯一無二の貴重な財産だ。

## 忘れられない津波の記憶

分で守るしかないんだよ」  
田畑ヨシさん（田中・85歳）  
は、8歳のときに昭和三陸地震津波を体験した。



昭和三陸地震津波を体験した  
田畑ヨシさん（田中・85歳）

津波のことは「思い出したくなくても思い出す、忘れられない記憶」になっていると  
言う。

当時、田畑さんは祖父母、両親、兄、姉、妹の8人暮らし。祖父は明治三陸地震津波の体験者で、田畑さんは津波の恐ろしさを耳にタコができるほど言い聞かせられていた。

「地震が来たら、何も持たなくていいから、一人でもすぐに逃げるんだ。命はてんでんこだぞ」。

田畑さんはこの日、翌日に控えたおひなさまを楽しみにしながら就寝。しかし、間もなくして津波を体験することとなってしまった。

「あのとき、祖父の教えが

あったから、わたしは生き延びることができました。一度避難した人でも、荷物を取りに戻った人は、二度と帰ってくることはありませんでした」。

祖父の教えもあり、津波から家族全員が助かった田畑さん。しかし、逃げる際に負ったけがの影響で三日後に母を亡くし、その4年後には、一家の生活を支えるため必死で働いていた兄も22歳の若さで亡くなった。

「これからどうなるのか、子どもながらに不安の日々でした。生き残った人たちも、みんながつかつたはず」と  
当時を振り返る。

## 紙芝居で語り継ぐ津波

昭和54年、津波の恐ろしさを孫たちに伝えようと、自身の体験をもとにした紙芝居「つなみ」を作った。

「自分の体験を、これからの人たちには経験して欲しくない」との強い願いが込められていた。

やがて、紙芝居は人々の目にとまり、地域の子どもたちだけでなく、県内や東京都からの修学旅行生などにも読み聞かせを行うまでになった。



田老第三小学校での読み聞かせの様子。児童のほか地域住民も参加した。

自分の役目は、「当時の出来事を風化させることなく、次の世代につなげること。世界中で大きな地震や津波が発生しています。日本でもいつ大きな災害が起こるか分かりません。いざというときに、わたしの経験が役に立つことになれば・・・」と言う。

『命はてんでんこ』自分の命は自分で守るんだ』祖父が残してくれた言葉。

実際に経験したことで、その言葉の重みに気付いた。悲劇を二度と繰り返してはならない――。

紙芝居「つなみ」は、昭和三陸地震津波の真実を語り継ぐ、わたしたちの貴重な財産となっている。



紙芝居

「つなみ」

絵・文 田畑ヨシ

(原文を一部現代仮名遣いなどに修正して掲載)



よっちゃんの住んでいる村は  
青い青い海と

白いどこまでもつづく  
長い砂浜がありました

きれいな川がながれ  
町のなかはずか  
ときどき

荷馬車がカタコトカタコト  
音をたてて通る  
しずかな  
しずかな村でした



よっちゃんのお家には  
白くて長いおひげをはやした  
おじいさんがありました  
おじいさんは いつもよっちゃんに  
津波のお話をしてくれました  
明治29年の津波に流されて  
たった一人ぼっちで助かった  
おじいさんでした  
いつかきつとまた  
津波がくるのだからな  
大きな地震が揺ったなら  
一人でも裏の赤沼山に逃げるんだよ  
大きな山のような波がきて  
さらわれるんだよ  
おじいさんは津波のとき  
逃げなかつたので  
家の下になつて流され  
気がついたときはざんがいやら  
ごみのなかに埋もつていて  
ようやくざんがいのなかから  
はいだしてみたら  
見渡すかぎり家はなく  
中田部落の吉川さんのお家まで  
たどりついて  
お世話になつて助かったものだと  
いろりの前で煙草を吸いながら  
話してくれました



よっちゃんは  
津波のきた夢をみました  
お家にある  
あの大きなかまどのうえに  
あがって助かった夢でした  
あーそうだ  
津波がきたら  
山に逃げなくても  
あのかまどの上にあがったなら  
助かるだろうなあーと  
いつも思っていました



三月三日のおひなまつりの  
夜でした

よっちゃんは

おばあさんと寝ていると

ガタガタと

大きな地震が揺りました

よっちゃんはとび起きて

おばあさんと はだしのまま

赤沼山の下まで走っていつて

ぶるぶるぶるえていると

お母さんが妹をおぶって

「おばあさん、よし子」と

大きな声でよぶ声がして

「電気もついたらし

家に帰っておいで」と

迎えにきたので

お家に帰ったら

いろりには大きな火がもえて

しんせきのおじいさんがきて

明治29年のときの

津波のことを話していました



よっちゃんが

こわくてぶるぶるふるふるえていると

おばあさんが

「寒いならこの袖なしでも着て」と言っ

て長い毛皮の袖なしを着せてくれた

おじいさんは

「津波がくるかもしれないから

逃げる準備をするように」と言っ

てお父さんは、たい松をたばねておき

わらぞうりをみんなのぶん、玄関にそろえて

大切なものをカバンに入れて

持って逃げるばかりに準備をしておりました

しんせきのおじいさんは

「井戸の水も川の水もひけないから

津波はこないだろう」と言っ

てのんきに話していました

すると、まもなくまた地震が揺り

お父さんが「津波だにげろう」と

大きな声でさげびました

海の方から

ドーンと大きな音がしました

よっちゃんは

むちゅうになつて玄関のぞうりをつかんで

はだしのまま走ったが

長い袖なしが足にからまって

なんかいもなんかいもころびながら

赤沼山に逃げました



よっちゃんは

赤沼山にむちゅうになつて逃げたが  
畑にかきねがあつて

飛びこえることもできないし

下からかきねのあいだをくぐろうと

いっしょうけんめいにもがいていると

大人の人は

よっちゃんの上を飛びこえてゆきました

「ここで波にさらわれるのかなあ」と思って

いつもおばあさんが地震のときとなえている

マンザラク、マンザラクとなえて

ようやくかきねをくぐつて畑にでました

逃げた人達はみんな

家族の名前をよんでいました

「お母さん、お父さん」などとさけんでいます

よっちゃんもころぼそくなり

大きな声で「おばあさん」とさけんだら

すぐそばにおばあさんと兄さんと姉さんがきて

安心しましたが

おじいさんが年寄りだからと心配になり

おじいさんをよんでもみえないので

そのままうしろ山のとっぺんまでのぼつて

朝になるのをまっていると

湯屋のおじさんがきて

「お母さんが足を両方けがをしている」と

おしえてくれました

兄さんはおじさんについてゆきました



「早く夜があけるといいなあー」と  
思っているうちに  
だんだん明るくなり  
山からぞろぞろ  
お寺のお墓道をおりてみると  
みんな家はなく  
海だけが  
高く青くすんで  
ざんがいと、いやなにおいが  
していました  
お寺の前には  
なんにんも  
けがをした人達がうめき  
流れた人が  
参道にごえて死んでいる人  
よっちゃんは  
「田老はもういやだ  
海のない所にゆきたい」と  
思いました



よっちゃんのしんぱいした  
おじいさんは  
いつのまにか  
お寺の本堂の前にすわり  
げたのはな・おのないう物を  
たくさんつんで  
わらを手でいっしょうけんめい  
なっ・ていきました  
おじいさんは  
なにをするのかなあとみていると  
げたにわらでなっ・たおをたてて  
はだしのまま逃げた人に  
あげておりました  
「おじいさんはえらいなあー」と  
思いました



お寺のくりのなかに入っていったら  
お母さんは

足を両方白いきれでまいて

こたつに よこたわっていました

「よし子、母さんはこんなになったよ」と  
言ってみせてくれました

よっちゃんは

たまらなくなくなりました

お父さんもお母さんを助けようとして

腰をいため歩けなくなつたと

おばあさんが話してくれました

遠くのしんせきの人達のくるのをまっ

お母さんを戸板にのせて

4人がかついで

山道を宮古の病院まではこんでゆきました

お母さんはおばあさんに

「子供達をたのみます」と言つて

涙をながしていました

よっちゃんは

お寺のかいだんのうえから

お母さんのゆくのをじつとみながら

なきたいのをがまんして見送りましたが

なみだをこらえたら

とてもどがいたくなりました

心のなかでよっちゃんは

「海のバカヤロー」と

なんかいも なんかいも さげびました

# 津波に立ち向かう① 田老大防潮堤

## 防災と復興の礎いしずえに

田老の防潮堤は、昭和54年に完成した。総延長は2433㍎、海面からの高さは10㍎に及ぶ。

田老の集落を抱え込むその姿から、「万里の長城」と称されることもある。

三陸沿岸の集落は、これまで幾度となく津波の被害を受けてきたが、その姿はあまりにも無防備だった。

「津波は忘れたころにやってくる」。そのため、風化が早く、備えがなかったのだろう。

明治の津波から37年後に襲来した昭和の津波を受け、田老ではその翌年の昭和9年、周囲からの義援金や村の借金などによる、自費での防潮堤整備が始まった。

津波に対する備えの第一歩だ。

「自分たちの村は自分たちで守る」村の熱意で始まったこの工事は、二年目以降、国と県による工事となった。

太平洋戦争による工事の一時中断もあったが、昭和27年の十勝沖地震津波を契機に再び工事を再開。昭和33年、全長1350㍎の防潮堤が完成した。

以後、二度の工事を経て、現在の大防潮堤が完成に至る。

平成21年4月、国と県による鉾ヶ崎地区の防潮堤事業化が決定した。鉾ヶ崎地区は宮古湾内で唯一、津波対策施設が整備されていない。

## 津波に立ち向かう② 高浜自治会自主防災部

# 自主組織で、防災力向上

市内にある34の自主防災組織。地域の住民が一体となり、災害に備える。「災害が起きたとき、動くのはわたしたち一人ひとり。だから、取り組む」「練習でできないものは、本番でもできるはずがない。だから、取り組む」。無駄になる訓練など何一つない。訓練はいざというとき必ず役に立つ――。



海と住宅地とを隔てる防潮堤の上に立つ高浜自治会の皆さん  
(前列左が自治会長兼自主防災部長の村上恒夫さん)

### 高浜自治会自主防災部

高浜自治会自主防災部は平成9年3月1日に結成された。現在は330世帯で組織する。

自主防災部は、定期的に自治会報で地域の防災情報を紹介しているほか、児童登下校中の津波発生による緊急避難を想定した訓練を行っている。昨年は、地区の子どもたちとともに、ハザードマップづくりにも取り組んだ。

さらに消火設備や避難経路などの確認を定期的に行うなど自主防災に余念がない。

### 自主防災組織とは

現在、市内には34の自主防災組織がある。

自主防災組織は「自分のまちは自分たちで守る」という、住民が自発的に自分たちを守り合うための組織。実際に災害が起きたとき、隣近所や自

治会が協力して取り組む。

組織を生かすためには、地区の役員だけが行うのではなく、住民一人ひとりが危機管理意識を共有することが重要だ。活動は、平時時と災害時に分かれ、災害時の被害軽減が最大の目的だが、平時時の活動の積み重ねが、災害発生時の組織機能につながる。

### 自主防災部の取り組み

高浜自治会自主防災部の部長を務める村上恒夫さん。

「いざ災害が起ったとき、最初に動くのは、わたしたち住民です。そのため、自治会として防災に対する予備知識と取り組みが必要」と話す。そして、「住民が地区の状況を知っていなければいけない。被害は、地形や昼夜の別など環境により大きく異なります。地区の特徴や弱点などをよく知ることが防災の最初



地域の住民に自主防災の啓発をする高浜自治会報



チリ地震津波で被害を受けた高浜地区（昭和35年5月24日）



「チリ地震津波の着水点」が示された岩間典子さんの自宅。亡きご主人が歴史を風化させないために作ったものだという



## 自主防災組織で 地域の防災力を高めませんか

大規模な災害が発生すると、防災関係機関による救助や消火などの活動が十分にできない場合が予想されます。

このようなとき、地域ぐるみの防災活動が被害を最小限にとどめるばかりか、スムーズな復旧活動にも大きな力を発揮します。

いざというときに協力しあえるよう、日ごろから地域内の交流を深め、災害に強い地域づくりに取り組みましょう。

自主防災組織について詳しく知りたい自治会、町内会、団体などは、お問い合わせください。

■問い合わせ 市危機管理課（☎62-2111）

「高浜地区は大きな被害を被り、立ち直るまでに苦労しました。ですから、住民の結びつきも強く、継続して取り組むことができたのかもしれない」と話す村上会長。

地区には、自主防災部のほかに消防団や婦人防火クラブ、青少年かもめ防火クラブ

「地震や津波は起こらないにこしたことはないが、いつか必ず起こります。実際に起こってみないと、どんな災害になるのかさえも分かりません。避難訓練は大切です。練習しないことは、本番では絶対できません。訓練は必ず役立ちます」高浜地区は住民一体となり、備えている。

## 継続した活動で備える

の「一歩」と強調する。昭和35年のチリ地震津波。高浜地区は家屋の流失、全半壊など市内でも大きな被害を受けた地区の一つ。当時、津波が襲来する前から漁師らが海の異変に気付き、住民が自主的に避難態勢をとったことで人命は助かったのだという。

がある。中でも小学生で組織するかもめ防火クラブは、活動を通して災害時の対応と「自分のまちは自分で守る」という自主防災の心を学ぶ重要な役割を担っている。

しかし課題もある。避難訓練参加者の減少と、一人暮らしの老人や介護を必要とする人など、一人で避難することが難しい人たちの避難手段の確保だ。

# 津波模型で、住民に啓発

先輩の作った模型を見て、津波の恐ろしさを知った。模型を作り、住民に啓発することの大切さを感じた。5年間にわたる津波模型の作製と地域での公開実演。津波の動きと地形を知ること、避難の仕方が見えてくる。



山野目弘担当教師と津波模型班の7人(左から野澤洸翔君、太長根悠君、大棒雄司君、川村将崇君、瀬川晴貴君、山崎裕介君、本田佑介君)

## 宮古工業高校「津波模型班」

宮古工業高校(兼平栄補校長、生徒29人)は、津波模型の作製に取り組み、地域の防災意識の向上に一役買っている。

津波模型は、機械科の3年生が平成17年度から毎年、課題研究の一環として取り組んできた。本年度の津波模型班は7人で構成する。

7人は、週3時間の課題研究授業のほか、放課後や夏休みなどを利用して津波模型を作製した。一つの模型を仕上げするのに7カ月程度を要する。

模型は、工業高校ならではのものづくりの技術を生かし、地形や町並みを忠実に再現。津波に見立てた水を流し入れることで、津波発生時に想定される浸水被害などが実際に目で確認できる仕組みになっている。

## 津波模型で意識啓発

模型班のリーダーを務めるのは川村将崇君。

「研究に取り進む前は、一つの授業課題という認識しかありませんでしたが、先輩の作った模型を見て、津波の恐

ろしさを知りました。模型を作り、住民に啓発することの大切さを感じました」と振り返る。

「地図には表れていない岩礁などの部分も、細部にわたって表現しています。実際に現場に向き、地形を確認して再現しました。津波の動きだけでなく、地形を知ることによって状況判断が変わってきます」と強調する。

模型はこれまでに、宮古湾全体のものをはじめ、鎌ヶ崎や藤原・磯鶏、津軽石・高浜、田老の各地区と山田町全体の6基を作製した。

現在は、重茂里地区と音部地区の2基を作製中だ。

模型は小中学校や公民館、イベント会場などに出向いての実演に利用している。

模型班を指導する山野目弘担当教師は、「うれしいことに年々、実演を希望する声が増えていきます。津波を体験した人でも、津波の動きを実際に見ると驚きます」と話す。しかし残念なこともあるという。

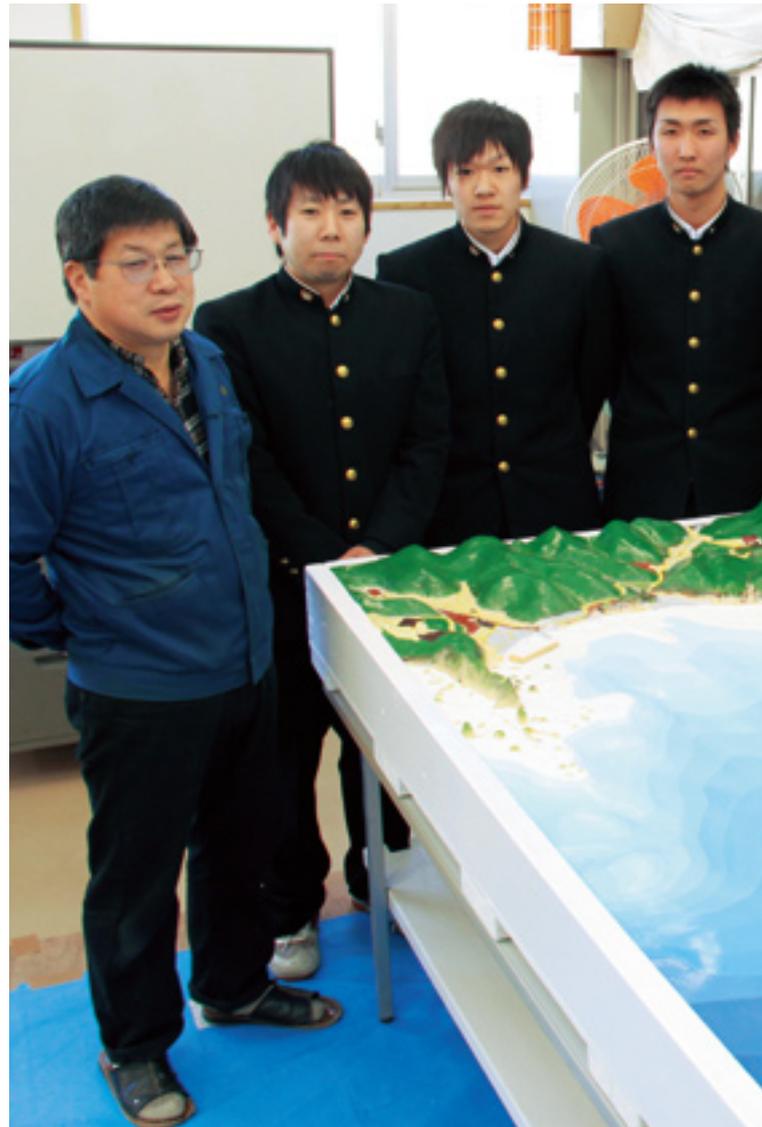
「若年層の人たちで津波模型に興味を示す人は多くはありません。津波に対する意識の低さが、いつか来る災害時の大きな被害の原因になるか



「宮古市産業まつり」会場での津波模型を使った実演。色を付けた水を津波に見立てて流し入れることで浸水区域などが一目で分かる



正確な縮尺で細部まで再現された津波模型の地形と町並み



## 津波模型の展示場所と 実演希望団体を募集します

### ●津波模型の展示

宮古工業高校が作製した津波模型は、次の場所に展示しています。

■**鉾ヶ崎地区** シートピアなあと1階イベントホール

■**田老地区** 田老総合事務所1階  
※宮古湾全体、藤原・磯鶏、津軽石・高浜、山田町全体の模型は工業高校にあります。展示を希望する施設などは、お問い合わせください。

### ●実演希望団体を募集

実演を希望する自治会や町内会、団体などは、お問い合わせください。

【共通】 ■問い合わせ 宮古工業高校 ☎67-2201

「ぼうさい甲子園」大賞受賞  
「ぼうさい大賞」を受賞した。ぼうさい大賞は、平成21年度の高校の部最高賞に当たる。5年間にわたる模型作製と、地域での公開実演により、住民の防災意識向上に努めている点が評価された。ぼうさい甲子園は、兵庫県とひょうご震災記念21世紀研究機構などが主催。防災教育の推進と顕彰を目的に開かれ、本年度は小学校から大学までの4部門に、全国から80団体が応募した。メンバーらは「受賞は先輩たちをはじめ、これまでの継

もれません」と危惧する。

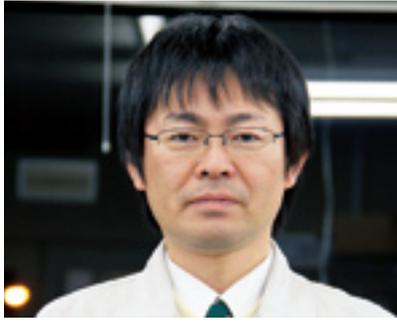
### 「ぼうさい甲子園」大賞受賞

多くの地区で実演を  
メンバーの多くは、津波模型班に入って、初めて津波の怖さを知った。重茂に住む山崎裕介君。

「祖母から津波の話は聞いていましたが、模型で津波の動きを目にして、津波の怖さをあらためて知りました。地元地形を知ること、啓発活動の必要性を強く感じました」と話す。

「いつか来る津波」ではなく、「近いうちに必ず来る津波」に備えるため——。津波模型班は、これからも積極的に地域に向き、啓発活動に取り組む。

続いた取り組みの成果。後輩たちにとっても励みになればうれしい」と喜ぶ。



山崎 正幸 さん  
(防災士・44歳)

祖母やお年寄りから聞いた津波の体験談や教訓を引き継ぎ、防災の視点から現代・次代に合わせて高めていきたいと思い、平成16年にNPO法人日本防災士機構の防災士認証を取得しました。

昨年7月には総勢222人、沿岸部55人、宮古地区16人で構成する日本防災士会岩手県支部を立ち上げ、少しずつではありますが活動を始めています。それぞれの得意分野で、身近な範囲での防災士活動に取り組みつつ、会員相互が広域的に連携しあうことにより地域全体の防災力を高めていきたいと考えています。

町内会に防災士を増やし、地域の防災力を高めたい



濱崎 弘 さん  
(和見町・62歳)

平成4年から、宮古地域の津波資料をまとめています。当時は津波に関するまとまった資料が少なく、各地に残されている石碑などを記録して歩きました。

過去の被害を知ると、災害時の避難方法や避難場所も変わってきます。この地域が、過去に幾度も津波被害にあってきたという歴史を忘れないように、資料として残していくことが大切だと思います。

これからも、わずかながら地域の防災に尽力できればと思います。

過去の被害を知ると、避難の仕方が変わります

## INTERVIEW

# わたしたちは、取り組みます



館洞 ひかり さん  
(宮古高校・17歳)

昨年度、宮古高校放送部では、津波防災を啓発する映像を製作しました。田畑ヨシさんのお話や校内で行った意識調査の結果、わたしたちは、津波への意識をもっと高く持つ必要があるのではと考えさせられました。

小中学校では津波について学ぶ機会がありましたが、忘れていたこともありました。

日中は、家族が学校や職場などさまざまな場所に離れています。津波をはじめ災害が起こったとき、わたしたち家族はどういう対応をとれるのか、家族で話し合ってみようと思います。

津波をはじめ災害時の対応を、家族で話し合いたい



木村 彩子 さん  
(三陸鉄道・33歳)

三陸鉄道は、明治三陸地震津波の後、住民の「津波からの復興に鉄道を」との願いからスタートして、現在に至っています。日々、お客さまを安心・安全に目的地まで送り届けることを第一に行動しています。異常時取扱マニュアルを策定し、毎年10月に実施する非常呼集訓練や、車両を使った異常時訓練を年2回実施するなど、災害時にも迅速な対応ができるよう、常に防災意識を高く持ち取り組んでいます。

昨年12月からは、非常食の販売を始めました。みなさんは災害時の備えは十分でしょうか。

お客さまの安全が第一。迅速な対応を心掛けます

# 自主防災力で守る命

## 今こそ築こう”心の防潮堤

「風化」が「人災」を引き起こし、「人災」は「大災害」を引き起こす。いまこそ、あらためて災害への備えを真剣に考え、行動に移すときだ。

### 進む防災意識の軽薄化

津波体験紙芝居の作者、田畑ヨシさんは言う。

「地震があるといつも、津波が来るぞ……と身構えます。あの日の記憶が脳裏をよぎるんです。荷物が入ったりリュックを背負い、すぐに避難でき

る態勢をとります」。

しかし、残念なことに「年々、避難訓練の参加者は減っています。以前大きな地震があったときのこと。あのときは避難指示こそ出ていませんでしたが、避難したのはわたし一人だけでした」と、意識の軽薄化が進んでいるこ

とを嘆く。

『防潮堤があるから大丈夫。周囲の人が避難しないから大丈夫。避難指示が出てから逃げる。防災は行政が行うもの——』と決めつけてはいないだろうか。『自分だけは被害にあわない——』という偏見を持つてはいないだろうか。

### 風化が引き起こす人災

「津波は忘れたころにやってくる」と人は言うが、果たしてそれは正しいだろうか。「人が災害を忘れていく」のではないだろうか。「自然が引き起こした大災害」は、「風化」が引き起こした人災」とも言えるのではないだろうか。

津波や地震などの発生そのものを防ぐことはできない。しかし、わたしたちの防災力が高ければ、被害を大幅に軽減することができるはずだ。

### 自主防災力で守る命

近い将来、高い確率で発生すると予想される宮城県沖地震。わたしたちはいま、災害への備えを真剣に考え、取り

組むべきときに来ている。3月3日、津波避難訓練が行われる（概要は広報2月15日号に掲載）。この機会に、いま一度、家族や地域で津波や地震への心得、避難所の位置や自身の役割、注意点などを考えてみよう。

過去の津波災害から得た多くの教訓は、未来へとつながる貴重な財産。

自分の命は自分で守る。家族の命は自分が守る。自分たちの地域は自分たちで守る。自主防災を培う風土が、このまちにはある。

まずは地域を知ろう。そして受け継いだ教訓を次世代に伝え、行動に移そう。その積み重ねこそが、心の防潮堤として、いざというときのわたしたちの防災力となる。

### ◎取材を終えて

世界各地で大惨事が起きている。

ことし1月のハイチ地震、平成17年のスマトラ島沖地震などの地震や津波、大雨など自然災害が相次いでいる。

国内に目を向けると、大規模災害では、岩手・宮城内陸地震（平成20年6月14日）、新潟県中越地震（平成16年10月23日）、阪神・淡路大震災（平成7年1月17日）などが挙げられる。

本市では、平成20年7月24日未明に、本市を震源とする震度5強の地震が発生したのは記憶に新しい。

このとき、沿岸部に住んでいる誰もが、「津波が来る」と思ったのではないだろうか。

幸い、生死に係わる被害はなかったが、大規模災害を経験したことのない若い人たちは、「いざ」というときの、備えの大切さを考えさせられた地震だったのではないだろうか。

田畑ヨシさんは、孫たちのために……と津波だけでなく田老地域に伝わる昔話を紙芝居に、昔の風習や生活の様子をカルタにと、「形」に残している。

そんな田畑さんは、当時の様子を楽しく教えてくれる。しかし、津波の話題になると自然と語気が強まり、その目からは悲しみと怒りが伝わってくる。津波の恐ろしさを真剣に伝えてくれた。

——命はてんでんこ。

「自分の命は自分で守る」というこの言葉には、苦い思いを抱く人たちもいるのだと聞く。子どもの手を離してまで生き延びようとした親、親に手を離されながらも自力で避難した子。ともに生き延びた両者の心には、深い溝が生まれたという。

日常が一瞬にして非日常に変わったとき、自分がその場にいたら……と考える。

果たして、わが子を、家族を、無事守りきれのだろうか。

だから、わたしたちは備えなければならぬ。「備えあれば、憂いなし」だ。

教訓は生かすためにある。

悲劇を二度と繰り返さないために。

〔参考資料〕震浪災害土木誌（昭和11年3月3日、岩手県土木課発行）、津波と防災（昭和44年1月31日、田老町発行）、宮古のあゆみ（昭和49年3月26日、宮古市発行）

〔資料提供〕株式会社文化印刷、気象庁旧宮古測候所、田畑ヨシ